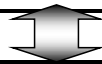


「運動やスポーツ、健康への見方・考え方を広げ、深める授業」をめざし、以下の5つの視点を基に実践の情報交換を行った。

- ①単元の組み方や発問を工夫する 「何を学ばせるのか？」  
「何ができるようになり、何が分かるようになるのか？」
- ②教材・教具・ルールなどを工夫する
- ③チーム編成を工夫する
- ④体育が苦手な生徒でも楽しめる工夫をする
- ⑤振り返りを工夫する 「生徒が何を学んだのか？（評価）」→「次にどんな改善が必要なのか？」



三豊・観音寺支部 実践報告の中で見られた「見方」・「考え方」

<水泳>

- ・ 速く泳ぐことばかりに注目するのではなく、少しでも長く泳げるためのルール工夫
- ・ フィンを使ってスピード感や水を蹴って進む推進力の体感

<球技 バレーボール・ソフトボール>

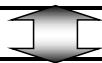
- ・ 簡易ルールで誰もがボールに触れるルールの工夫  
(バレーボール：キャッチ・ワンバンあり、5回返球、ボール・コート・ネットの高さの工夫)  
(ソフトボール：三角ベースボール、3チーム制少人数チーム)
- ・ 簡易ルールによる基礎基本の技能の明確化とチームプレーの焦点化
- ・ バレーボールの特性を考え、醍醐味である「スパイク」を核とした授業づくり
- ・ ホワイトボードや記録用紙を工夫し、データからチームの課題の分析、他のチームとの比較

<器械運動>

- ・ 学習の前後で技のできばえがどれくらい美しくできるようになったかの評価の工夫

<体づくり運動>

- ・ 上手くできるコツの視点（視線の動き、体（上体・腰・膝など）の角度、手の形、ボールの動きと自分の体の位置）



<「見方・考え方」を働かせるための発問の視点>

- ①「見方・考え方」を引き出す発問
  - ・ これまでの知識や経験から導き出すことができる。
  - ・ 多様な考えがもてる。
  - ・ 課題が発見できる。
  - ・ 考えの見通しが持てる。
- ②「見方・考え方」を鍛える発問
  - ・ 「自分だったら」と当事者意識が待てる。
  - ・ 知識と関連させ、概念的・汎用的な考えに高める。
  - ・ 考えを比較、検討、吟味する必要性を感じる。
  - ・ これまでの考えが揺さぶられ、価値観などが変容する。

教師主導の授業展開や対話になりにくい話し合い活動を変えていく手がかかりは「発問」。学習指導要領でも「見方・考え方」を働かせることが主体的・対話的で深い学びの鍵と示された。

**「見方・考え方」を働かせるための「発問を工夫した授業」が大切なのは？そのためには、教師のその教材に対する「見方・考え方」が最重要。**

## 「見方・考え方」の捉え方

### 「見方・考え方とは」

「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という教科等ならではの物事を考える視点や考え方である。

各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることこそ、教員の専門性が発揮されることが求められる。

### 「体育の見方・考え方とは」→「豊かなスポーツライフを実現する」ための「見方・考え方」

運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え（見方）、自己の適性に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること（考え方）

例えば・・・

- ・ 1つの種目を学習することによって、類似の動きに変えたり、他種目の動きにつなげる。
- ・ 「する」では、中学校であれば、部活動や地域でのスポーツ活動等の実生活でいかされる。
- ・ 「支える」であれば、大会等の運営に参加するだけでなく、授業の中でお互いにアドバイスし合う活動でも十分仲間を支えることにつながることを自覚させることによって、効果的なアドバイスを送るための知識を自ら得ようとしたり、仲間との関わり方を考えたりする。

#### 【ベースボール型】

- ・ ベースボール型の授業において、これまでも「打つ」ことが苦手な子どもに対してバットよりも幅の広いものやラケットを使って授業を行っていた。

↓さらに踏み込んで、

運動やスポーツの価値につながる協力や参画、共生に着目できるような仕掛けをする。例えば、「何のためにこんな工夫をしているんだろう？」と発問し、工夫の理由を生徒に返す。その際、生徒からの「みんなと一緒に楽しむため」という答えを出す過程を大切にし、「みんなが楽しむためには用具やルールを工夫すればよい」という新しい知識は、社会の中で働く新しい知識になる。（考え方）

☆ 実際の体育の授業を通して、この体育の見方・考え方を核としながら、育成すべき資質・能力の三つの柱（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）を統合しつつ、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現できる力を育て、このことによって生徒の体育の見方・考え方が深まるように指導していくことが大切である。

↓

#### ★「知識及び技能」：何を理解しているか、何ができるか

運動の合理的な実践を通して、①運動の楽しさや喜びを味わい、②運動の行い方や体力の必要性を理解して、③基本的な技能を身につける。

「知識」：体の動かし方などの具体的な知識、運動実践や生涯にスポーツにつながる概念や法則

「技能」：運動学習を通して、各領域の特性や魅力に応じた楽しさや喜びを味わうこと、各領域における技能、攻防や動き

#### ★「思考力、判断力、表現力等」：理解していること・できることをどう使うか

運動についての①自己（や仲間）の技能的な課題や学習の中で課題を発見し、②合理的な解決に向けて思考し判断する力（運動の取り組み方の工夫）を養い、学習したことを基にして解決の仕方や気付いたこと

について③自己や仲間の考えたことを他者に伝える力を養う。

★「学びに向かう力、人間性等」：どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

運動に競争や協働の経験を通して、①公正、協力、責任、共生（一人ひとりの違いを認めようとする）  
参画などの意欲を育て、健康・安全に留意して、②積極的に取り組み、自己の最善を尽くして運動をする態度を養う

「保健の見方・考え方とは」→「健康」に関する見方・考え方

個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え（見方）、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること（考え方）

例えば・・・

多くの子どもたちは、健康には「運動、食事、休養及び睡眠」などが必要であることを知識として持っている。

教材として、日課表や事例を用いて、「運動、食事、休養及び睡眠」がそれぞれ個別にあるのではなく、一日の生活リズムに合わせて調和のとれた生活を続けることが必要であることを学習する。（見方）

↓さらに踏み込んで、

そのことが「なぜ必要なのか」発問するなどし、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上などと関連づけて考える活動を組み合わせる（考え方）

☆ 疾病や傷害を防止するとともに、生活の質や生きがいを重視した健康に関する観点を踏まえ、

↓

★「知識及び技能」

①個人生活を中心として科学的に理解できるようにするとともに、それらの内容に関わる②基本的な技能（ストレス対処や心肺蘇生法等）を身に付ける

★「思考力、判断力、表現力等」

①健康に関わる事象や健康情報などから自他の課題を発見し、②よりよい解決に向けて思考したり、様々な解決方法の中から適切な方法を選択するなど判断をしたりするとともに、③それらを他者に表現することができるようにする

★「学びに向かう力、人間性等」

①自他の健康に関心をもち、現在だけでなく生涯を通じて②健康の保持増進や回復を目指す実践力の基礎を育てる